

# ローマ、ビジョンを確立する - ナンバー・ファイブ

アドベンティズムにおける繰り返される預言論争を解き明かす：『汝の民の略奪者たち』を理解する

Jeff Pippenger  
2024-08-09

前回の記事では、ミラー派の時代から今日に至るまでのアドベンチズムの歴史の中で起こってきた、預言をめぐる六つの論争の流れを特定した。私は、ダニエル書11章14節の「あなたの民を略奪する者たち」をめぐる最初と最後の論争は、預言的に同一であると主張する。ミラー派はこの「略奪者」をローマと理解し、プロテスタントは「略奪者」をアンティオコス・エピファネスという名のシリアの王だと教えた。

また、そのころには多くの者が南の王に逆らって立ち上がる。さらに、あなたの民の略奪者たちも、幻を成就させようとして高ぶる。しかし、彼らは倒れる。ダニエル 11:14.

十節に始まり十五節まで、エジプト王国とシリア王国の間の戦争が描かれている。この箇所ではエジプトは「南の王」、シリアの王は「北の王」として表されている。十節は、歴史家が第四次シリア戦争の始まり（紀元前219年）と呼ぶ出来事を示し、十一節と十二節は紀元前217年のラフィアの戦いとその余波を描いている。さらに十三節から十五節は紀元前200年のパニウムの戦いを示している。十節から十五節に登場するシリアの王は、セレウコス帝国の支配者アンティオコス・マグヌスである。

第十節は、アンティオコス・マグヌスが、かつてセレウコス王国から奪われた領土を回復するために戦争を始めた時期の歴史を描いている。この節では、彼は紀元前219年に失地を回復するが、攻勢を一時中止し、軍事力の再編を図る。彼は失地の支配を取り戻し、プトレマイオス朝が支配する南の王国、エジプトの国境まで進出した。紀元前219年から紀元前217年にかけて、南の王も北の王も、迫り来るラフィアの戦いに備えて計画を練った。

ラフィアの戦いは紀元前217年に起こり、プトレマイオスが支配する南の王国エジプトが、予言の箇所における北の王であるシリアの王アンティオコス・マグヌスに打ち勝った。次いで節13から15では、その17年後の紀元前200年に、当時マケドンのフィリップと同盟を結んでいたアンティオコス・マグヌスがパニウムの戦いでエジプトと交戦したことが述べられる。その時、南の王国エジプトには5歳か6歳の幼い王がおり、アンティオコス・マグヌスとフィリップはその幼王につけ込まずにはいられず、アンティオコス・マグヌスがパニウムの戦いで勝利した。パニウムの戦いを表す三つの節の中には第14節が含まれており、そこで予言の叙述に新たな勢力が導入される。

「あなたの民の略奪者」は、「南の王」であるエジプト王や、「北の王」であるセレウコス朝の王、あるいはマケドニアの支配者フィリポとは異なる権力である。ミラー派は、

ローマこそが「あなたの民の略奪者」であると認識していた。「略奪者」と訳されるヘブライ語の語根の一つは、「打ち砕く者」を意味する。異教ローマは、預言において、粉々に打ち砕く権力として描かれている。

この後、私は夜の幻の中で見た。見よ、第四の獣がいた。それは恐ろしく、恐るべきもので、きわめて強かった。大きな鉄の歯を持ち、それは食い尽くし、打ち砕き、残りをその足で踏みつけた。また、それはそれ以前のすべての獣と異なっており、十本の角があった。ダニエル書 7:7

ユライア・スミスが盗賊について論じるとき、彼は、盗賊は破る者を表していると指摘する歴史家を引用する。

「ここで新たな勢力が導入される—『汝の民の略奪者』。逐語的には、とニュートン主教は言う、『汝の民を打ち砕く者』。遠くティベル川のほとりで、ある国が野心的な企図と暗いたくらみを糧として自らを養っていた。当初は小さく弱かったが、驚くべき速さで力と精気を増し、あちこちに慎重に手を伸ばしてその武勇と戦の腕の逞しさを試し、やがて自らの力を自覚すると、地上の諸国の間で大胆に頭角を現し、無敵の手で彼らの政の舵を握った。それ以後、ローマという名は歴史の頁に刻まれ、長き時代にわたって世界の事柄を支配し、時の終わりに至るまで諸国民の間に強大な影響力を及ぼす運命にある。」

「ローマは語った。すると、シリアとマケドニアは、彼らの夢の様相にまもなく変化が訪れつつあることを知った。ローマ人はエジプトの若い王を支持して介入し、彼がアンティオコスとフィリポによって企てられた破滅から守られるべきであると決意した。これは紀元前200年のことであり、シリアとエジプトの affairs に対するローマ人の最初の重要な干渉の一つであった。」Uriah Smith, Daniel and Revelation, 257.

これらの節に述べられている預言は、紀元前219年から紀元前200年にかけてのおよそ二十年の間に成就したが、預言者たちは自分たちの生きた時代よりも終わりの日について多く語っている。

「古代の預言者たちは、それぞれ自分たちの時代のためよりも、むしろ私たちの時代のために語ったのであり、そのゆえに彼らの預言は私たちに対して効力を有している。『これらの事が彼らに起ったのは、他の人々に対する警告としてであり、それが書かれたのは、世の終りに臨んでいる私たちを戒めるためである。』コリント人への第一の手紙 10:11. 『彼らが仕えたのは自分たちのためではなく、あなたがたのためであって、そのことは、天から遣わされた聖霊によってあなたがたに福音を宣べ伝えた人々を通して、今やあなたがたに告げ知らされたのである。御使いたちも、それらのことをつぶさに見たいと願っている。』ペテロの第一の手紙 1:12. ……」

「聖書は、この最後の世代のために、その宝を蓄え、ひとまとめに束ねてきた。旧約聖書の歴史におけるすべての偉大な出来事と厳粛な事柄は、この終わりの時代の教会において、これまでも、そして今もなお、繰り返されている。」『セレクトッド・メッセージズ』第3巻、338、339頁。

私たちが検討している二十年の期間にダニエルが生きていたわけではないが、ホワイ  
ト夫人の著作を通して与えられた靈感は、ダニエル書11章に記録された歴史の多くが、同  
章の最終的成就において繰り返されることを私たちに教えている。

「私たちには無駄にできる時間はない。困難な時代が私たちの前に迫っている。世界は  
戦争の機運にかき立てられている。まもなく、預言に語られている苦難の出来事が起  
こるだろう。ダニエル書第11章の預言は、ほとんど完全に成就しようとしている。この  
預言の成就として起こった歴史の多くが繰り返されるだろう。」 Manuscript  
Releases, 第13号、394。

ダニエル書11章10節から15節は、まもなく到来する日曜法へと至る終末の歴史を表して  
いる。というのも、16節は、ローマが初めて「麗しの地」を征服した時を示しているから  
である。

しかし、彼に向かって攻めて来る者は、自分の思うままに行い、誰も彼の前に立つこ  
とはできない。彼は麗しい地に立ち、その地は彼の手によって滅び尽くされる。ダニ  
エル書 11:16

ダニエルは自身の著作の中で「栄光の地」という表現を二度用いている。最初に現れるの  
は第16節で、文字通りの異教ローマがユダの文字通りの「栄光の地」を征服したときで  
ある。

「エジプトは北の王アンティオコスの前に立つことができなかったが、アンティオコ  
スもまた、今や彼に向かって来たローマ人の前に立つことができなかった。もはや、  
いかなる王国もこの勃興しつつある勢力に抵抗することはできなかった。シリアは征  
服され、ローマ帝国に加えられた。すなわち、紀元前65年、ポンペイウスがアンティ  
オコス・アジアティクスからその領有を奪い、シリアをローマの属州としたのである  
。」

「同じ権力はまた聖地に立ち、これを食い尽くすことになっていた。ローマは紀元前1  
62年、同盟によって神の民であるユダヤ人と結び付きを持つようになり、この時点か  
ら預言的年代において顕著な位置を占める。しかしながら、実際の征服によってユダ  
ヤに対する支配権を獲得したのは紀元前63年になってからであり、しかもそれは次の  
ような仕方によってであった。」 Uriah Smith, Daniel and Revelation, 259.

ダニエルが「栄光の地」を用いているもう一つの節は四十一節です。

彼はまた麗しい地に侵入し、多くの国々が打ち倒される。しかし、エドムとモアブ、  
そしてアンモンの子らの主だった者たちは、彼の手から逃れる。ダニエル書 11:41

四十一節は当然ながら四十節に続いており、四十節は「そして終わりの時に」という言  
葉で始まります。『The Great Controversy』において、シスター・ホワイ  
トは1798年を「終わりの時」と特定しているので、四十一節は1798年の終わりの時の後に続く歴史を  
示しています。

「しかし、『終わりの時には多くの者があちこちを歩き巡り、知識が増し加わるであ  
らう』と預言者は言う。ダニエル書12章4節。……1798年以降、ダニエル書の封印は解  
かれ、預言に関する知識は増え、多くの人々が裁きの時が近いという厳粛なメッセー

ジを宣べ伝えてきた。」『大いなる論争』356頁。

41節にある「栄光の地」は、文字どおりの古代のユダではなく、霊的な現代のユダである。アメリカ合衆国は霊的な現代のユダであり、41節はアメリカ合衆国における間もなく制定される日曜法を指し示している。

しかし、最初に霊のものがあつたのではなく、まず自然のもの、その後に霊のものです。コリント人への第一の手紙 15:46

その日曜法は16節によって象徴されている。なぜなら、ダニエル書11章の成就において「これまでに展開した歴史の多く」が繰り返されるからである。10節から15節は、終わりの時代において、日曜法に先行し、それへと至る歴史を表している。

その五つの節における北の王と南の王は、セレウコス朝の王安ティオコス・マグヌスとプトレマイオス朝のエジプト王たちによって成就されたが、近く到来する日曜法へと至る歴史の焦点となる勢力を象徴している。これらの節は十四万四千人の運動の歴史を明らかにしている。第十節が1989年のソビエト連邦の崩壊を、そして第十六節が近く到来する日曜法を指し示しているからである。

キリストは、10節を40節と、16節を41節と照応させることによって、これらの節を強調している。41節の霊的な「栄光の地」の型である文字通りの「栄光の地」への直接の言及が、これら六つの節の終わりであり、始まりは10節である。

キリストが16節と41節の間に直接の関連があることを確かにされたのと同様に、10節も40節と直接の関連があります。10節の表現「overflow, and pass through」は、40節で「overflow and pass over」と訳されているのと同じのヘブライ語句です。この語句は聖書の中ではもう一か所にしか見られませんが、10節や40節とは少し異なる訳になっています。それでも、同じヘブライ語句です。

彼はユダを通り抜け、氾濫して押し寄せ、越えていき、首にまで達する。伸ばしたその翼は、インマヌエルよ、あなたの地の広がりを満たす。イザヤ書 8:8

イザヤ書の「氾濫して越え行く」は、10節の「氾濫して通り抜ける」および40節の「氾濫して乗り越える」と同じである。さらに言えば、この三つの節はいずれも、北の王が南の王に攻撃をしかけることを描写している。イザヤ書では、北の王であるアッシリアのセンナケリブが、イスラエルの南王国であるユダを攻撃していた。10節では、セレウコス帝国の北の王安ティオコス・マグヌスが、南の王国であるエジプトを攻撃していた。40節では、40節の冒頭で致命的な傷を負った北の王、すなわち教皇権が、南の無神論勢力であるソビエト連邦を攻撃していた。各節は、北の王と南の王との争いという同じ預言的構造を示しており、いずれの節でも北の王は「氾濫して越え行く」。

イザヤの証言と第十節はどちらも、北の王が攻め寄せても、南の王国の首都に入る前にその進軍が止まることを示している。センナケリブは戦をエルサレムの城壁まで持ち込んだが、それ以上は進まなかった。紀元前219年、アンティオコス・マグヌスはエジプトの国境まで来て、そこで止まった。その後、2年後の紀元前217年に起こったラフィアの戦いで敗れた。センナケリブもエルサレムの城壁まで来たが、神が介入したため、戦いに敗れ

た.

それゆえ、アッシリアの王について主はこう仰せられる。彼はこの都に入らず、ここに矢を放たず、盾を携えてこれに迫ることも、これに対して土塁を築くこともない。彼は来た道をそのまま引き返し、この都に入ることはない、と主は言われる。わたしは自分のため、またわたしのしもべダビデのために、この都を守って救うからである。その夜、主の使いが出て行き、アッシリアの陣営で十八万五千人を撃った。人々が朝早く起きて見ると、みな死体となっていた。そこでアッシリアの王センナケリブは出立して去り、帰ってニネベに住んだ。やがて彼が自分の神ニスロクの宮で礼拝していたとき、彼の子アドラメレクとシャレツェルが剣で彼を打ち、彼らはアルメニアの地へ逃れた。こうして彼の子エサルハドンが彼に代わって王となった。列王記下 19:32-37.

1989年、北の王はソビエト連邦を一掃したが、ソ連の首都を陥落させることはなかった。ロシアは存続した。次の戦いは、十一節と十二節に象徴されているラフィアの戦いであり、これはまた、センナケリブの軍の撃破と彼のその後の死によっても象徴されている。これは南の王の勝利を示しており、センナケリブの証言ではユダ、アンティオコス・マグヌスの証言ではラフィアである。

十節は四十節に、十六節は四十一節に、それぞれ直接に結び付いている。十節から十六節は、1989年から日曜法に至る歴史を表している。四十節に描かれている隠された歴史は、1989年のソ連崩壊に始まり、日曜法に至るまで続く。また、十節はレビ記二十六章の「七つの時」をその隠された歴史に直接結び付けているが、その真理の筋道はここで述べている内容の範囲外である。

ミラー派の歴史において、ローマの正しい同定をめぐるアドベンチズム内部の六つの主要な論争の最初のものが起こったが、その争点は14節の「略奪者たち」が誰を指すのかという点であった。プロテスタントはそれがアンティオコス・エピファネスを指すと主張し、ミラー派はそれをローマと同定した。ローマの正しい同定をめぐるアドベンチズムの最後の論争においても、争点はやはり14節の「略奪者たち」である。ミラー派によって代表される一方の陣営は、予言の霊によって支持されたミラー派の基礎的理解を堅持している。

私は、1843年の図表が主の御手によって導かれ、変更してはならないこと、また、数字は主が望まれたとおりであったこと、さらに、御手がその上を覆っていくつかの数字の中にある一つの誤りを隠し、御手が取り去られるまで誰にもそれが見えなかったことを見た。『初期の著作』74頁。

その神聖な図表は、紀元前164年という表記によってその論争を示している。

164年、アンティオコス・エピファネスの死。もちろん、彼は諸侯の君に立ち向かったのではない。諸侯の君が生まれるより164年前にすでに死んでいたのだから。

聖なる図表にあるその論争への言及は、神の御言葉の預言的な聖句に基づいていない、聖なる図表に示された唯一の真理を表している。そうすることでそれは、聖書の歴史ではなく再臨運動の歴史における道標を特定しており、「それは変更されるべきではない」。

なぜなら、その論争は、預言的な幻がどのように確立されるかを示しているからである。その基礎的な真理を退けることは、同時に、聖なる図表に対する『預言の霊』の承認の権威をも退けることである。

「サタンのまさに最後の欺きは、神の御霊の証しを無効にしてしまうことである。『幻がないところでは、民は滅びる』（箴言29:18）。サタンは巧妙に、さまざまな方法で、またさまざまな経路を通して働き、真の証しに対する神の残りの民の信頼をぐらつかせようとする。彼は人を惑わすために偽の幻を持ち込み、偽りを真実と混ぜ合わせ、ついには人々をうんざりさせて、『幻』という名のつくものは何でも一種の狂信だと見なすようにさせる。しかし、誠実な魂は、偽りと真実を対比することによって、それらを見分けられるようになる。」『Selected Messages』第2巻、78。

「あなたの民の略奪者たち」の最後の論争は最初のものと同じであり、幻を確立する象徴を理解しなければ、「民は滅びる」。彼らが「滅びる」のは、彼らが「神の御霊の証しを無効にする」からである。

別の一派は、第十四節の「略奪者」として合衆国が表されていると主張している。その一派は、十節から十五節におけるアンティオコス・マグヌスが合衆国を表していることを、見ることができないか、見ようとしな。ミラー派の歴史におけるプロテスタントが略奪者はアンティオコスだと主張したのと同様に、見ようとしな。その一派は、略奪者をアンティオコスを型とする勢力（合衆国）だと見なしている。

首都エルサレムにまで達したが失敗に終わったセンナケリブのユダへの攻撃は、センナケリブの将軍ラブ・シャケによって率いられた。

「それゆえ今、どうか、我が主アッシリアの王と賭けをしなさい。もしあなたが自分の側でその上に乗せる騎手を整えられるなら、私はあなたに二千頭の馬を与えよう。それでいて、どうしてあなたは、我が主のしもべのうち最も取るに足りない者のひとりの隊長すら撃退できようか。戦車と騎兵のことでエジプトに頼ろうというのか。今、私は主なしにこの所に攻め上って、これを滅ぼしに来たとでもいうのか。主は私に、『この地に攻め上り、これを滅ぼせ』と言われたのだ。」そのとき、ヒルキヤの子エリヤキムとシェブナとヨアはラブシャケに言った。「どうか、しもべどもにはアラム語で話してください。私たちはそれがわかります。城壁の上にいる民の聞いているところで、ユダの言葉で私たちに話さないでください。」しかしラブシャケは彼らに言った。「私の主が、あなたの主とあなたにこれらの言葉を語るために私を遣わしたとでも思うのか。むしろ、城壁の上に座っている人々に語らせるためにこそ、私を遣わしたのではないか。彼らがあなたがたと共に自分の糞を食らい、自分の尿を飲むようになるために。」そこでラブシャケは立ち上がり、ユダの言葉で大声で叫び、こう言った。「大王、アッシリアの王の言葉を聞け。」列王記下 18章23-28節。

ラブシャケは自分の言葉ではなく、アッシリアの王センナケリブの言葉を述べていた。ダニエル書11章40節の北の王は教皇権であり、終わりの時である1798年に無神論的なフランス、すなわち南の王の手によって致命的な傷を受けた。その節では、北の王は最終的に報復し、1989年に南の王国（ソ連）を押し流して打ち負かす。北の王がその働きを成し遂げたとき、彼は「戦車と騎兵と多くの船」を伴って来た。「戦車と騎兵」は軍事力を、「船」は経済力を表す。これらの象徴は、ラブシャケを型として、1989年の勝利においてア

アメリカ合衆国が教皇ローマの代理軍であることを示している。10節から15節に登場するアンティオコス大王はアメリカ合衆国を表しており、またウィリアム・ミラーが正しく見抜いたように、14節の「also」という語が預言の叙述に新しい勢力の登場を確立しているので、「robbers」は南のプトレマイオス朝の王たちとも、北の王アンティオコスやマケドニアのピリッポスとも異なる独自の勢力を表さねばならない。

この節の「南の王」は、疑いなくエジプトの王を意味する。しかし、「あなたの民の略奪者たち」が何を指すのかについては、なお人によっては疑問が残るかもしれない。それがアンティオコスやシリアのいかなる王をも意味しえないことは明らかである。というのも、天使は直前のいくつかの節でその民族について語っており、ここで「また、あなたの民の略奪者たちも……」と言って、明らかに別の国民を暗示しているからである。アンティオコスがユダヤ人を掠奪したことは、たしかにあったかもしれないとは認めよう。しかし、幻のどこにもアンティオコスがその種の行為をしたとは語られていないのに、どうしてそれが「幻を確立する」ことになろうか。というのも、彼は幻の中ではいわゆるギリシャの王国に属しているからである。さらに、「幻を確立する」とは、それを確かなものにし、完成させ、成就させることを意味するにちがいない。ウィリアム・ミラー『ミラー著作集』講義6、89。

「アンティオコス」は、シリアのセレウコス朝の多くの王が選んだ名である。その王朝の創設者はセレウシド・ニカトルで、セレウコス朝の王は全体でおよそ二十六から三十人いた。それらの王の多くが「アンティオコス」という名を選んだが、これは多くの教皇が教皇に選出されるときに即位名を選ぶのと同様である。教皇は皆「反キリスト」であり、それは「キリストに反する」という意味である。「anti」とは「反対」を意味する。彼らは反キリストとして、その霊的な始祖であるサタンの名を取っている。サタンと教皇はどちらも啓示において反キリストとされている。

「反キリストが天において始めた反逆を遂行しようとするその決意は、不従順の子らのうちに働き続けるであろう。」Testimonies、第9巻、230。

教皇はサタンの代理人であり、そのため教皇もサタンもキリストに敵対しており、したがって「反キリスト」である。彼らは教皇の地位に就くときに名を選び、サタンの地上の代理人となる。

世の利得と名誉を確保するために、教会はこの世の有力者たちの好意と支持を求めるように仕向けられ、こうしてキリストを退け、ついにはサタンの代表者-ローマの司教-に忠誠を誓うに至った。『大論争』、50。

彼らの行いによって彼らがわかる。そして、教皇たちはサタンと同じ働きを続けている。

ローマ教皇を通して、地上においても、暗黒の君が追放される以前に天の宮廷で行われていたのと同じ働きが行われてきた。サタンは天において神の律法を改正し、自らの修正案を持ち込もうとした。彼は自分の判断を創造主のそれより高く掲げ、自分の意志をヤハウエの御心の上に置き、このようにして事実上、神は誤りうるのだと宣言したのである。教皇もまた同じ道をたどり、自らの無謬性を主張して、神の律法を自分の考えに合うように調整しようとし、天と地の主の律例と戒めの中に自分が見いだすと思っている誤りを正すことができると自負している。彼は事実上、世界に向かっ

てこう言っている。「私はヤハウエのものより優れた法をあなたがたに与える」と。これは天の神に対するなんという侮辱であろうか！  
サインズ・オブ・ザ・タイムズ、1894年11月19日。

セレウコス1世ニカトルがセレウコス朝を樹立したが、その後の多くの王が選んだ王名「アンティオコス」は、セレウコスではなく彼の父を讃えるためのものであった。セレウコスの父アンティオコスは貴族であり、マケドニア王フィリッポス2世（アレクサンドロス大王の父）に仕える将軍であった。こうした貴族的身分と軍事的経歴は、アレクサンドロス大王の死後にセレウコス自身が重要な役割を担い、その後権力を握るための基盤を築くのに寄与した。

セレウコスの王国は、彼がアレクサンドロスの帝国の四つの領域のうち三つを掌握したときに成立した。ローマもまた、支配権を握って北の王となるため、三つの地理的勢力を征服する。セレウコスが東・西・北を確保したとき、歴史叙述において彼は北の王となり、首都はバビロンの都であった。その後の多くの王は、政治的な始祖を称えるため、北の王位に就く際に「アンティオコス」という名を選んだ。見ようとすれば、その類比は容易に見て取れる。見ようとしなければ、見えない。

「アンティオコス」という名（ギリシア語ではἈντιόχος）は、ギリシア語の要素「anti」（「～に対して」「反対の」の意）と「ocheo」（「しっかり保持する」「維持する」の意）に由来する。北方の王たちは、反キリスト（教皇たち）が統治を始める際に名を選ぶのと同様に、父祖の政治的遺産を保持するためにこの名を選んだ。教皇がその父である悪魔の代理者であるのと同様に、シリア帝国のアンティオコスたちもその父の代理者の型を示している。この適用において、アンティオコスは彼らの父の代理者を表す。1989年における教皇権の代理はアメリカ合衆国であり、世俗的な証言は、旧ソ連を打倒するための働きにおける反キリストたる教皇ヨハネ・パウロ二世とロナルド・レーガンの関係を裏づけている。

10節から16節において、その最初と最後の節は、40節と41節への直接的な言及を含んでいる。10節は40節に直接対応している。16節は41節に直接対応している。これらの節は、終わりの日に関するダニエル書の預言の一部を示している。

封印された書はヨハネの黙示録ではなく、終わりの時に関するダニエル書の預言の一部分であった。聖書はこう言っている。「しかし、ダニエルよ、この言葉を秘め、巻物に封印をせよ。終わりの時まで。多くの者が行き巡り、知識は増し加わる」（ダニエル書12:4）。その書が開かれたとき、「時はもはやない」との宣言がなされた。（黙示録10:6参照）ダニエル書は今や封印が解かれ、キリストがヨハネに与えた啓示は地上のすべての住民に伝えられることになっている。知識が増し加わることによって、終わりの日に立つための民が備えられるのである……。

「第一の天使のメッセージにおいて、人々は、世界とそこにあるすべてのものをお造りになった、わたしたちの創造主なる神を礼拝するように求められている。彼らは教皇制が設けた制度を崇敬し、ヤハウエの律法を無にしてきたが、この主題に関する知識は増し加わるであろう。」『Selected Messages』第2巻、105、106ページ。

1989年の「終わりの時」に、ダニエル書11章の最後の六節は「終末の日々に関するダニエルの預言の一部」を表している。これはその時に封印が解かれた際にそうと認められ、その封印の解放は「教皇制度、すなわちエホバの律法を無効にすること」についての知識の増加をもたらした。アルファでありオメガである方は、常に初めによって終わりを示される。そして、1989年に始まった試練の過程は、礼拝者を二つの種類に分けるように設計されていた。

彼は言った。「ダニエルよ、あなたの道を行きなさい。これらの言葉は終わりの時まで閉ざされ、封印されている。多くの者は清められ、白くされ、試される。しかし、悪しき者は悪を行い、悪しき者のうちには悟る者がいない。だが、賢い者は悟る。」ダニエル書 12:9、10

私たちは今、その試練の過程の最終段階にいる。というのも、アドベンチズムの黎明期における略奪者をめぐる論争が、今まさに繰り返されているからである。略奪者をアメリカ合衆国だと特定することは、アンティオコスを略奪者だと特定することに等しい。それはミラー派とプロテスタントの間で展開された論争と同一である。

1989年に始まった試練の過程の初めと同様に、その終わりにおいても、ユダ族の獅子が「終わりの時に関するダニエル書の預言のその部分」の封印を解く。1989年には、それはダニエル書11章の最後の6節であり、終わりにおいては、10節から16節によって型示されている40節の隠された歴史である。

今後の記事で、アドベンチズムの歴史における六つの論争の流れについての考察を続ける。これら六つの論争のうち最初のもは、最後のものを例証している。私たちは、ローマの象徴によって確立されている「幻」を神の民が正しく分けることを妨げようとする義の敵の取り組みに関わる諸要素を明らかにしていく中で、最初と最後の論争を用いて、他の四つの論争に重ね合わせていく。

永遠へと速やかに過ぎ去っていく時の重大さを理解し、神の大いなる日に立つ備えをしないなら、私たちは不忠実な管理者となるだろう。見張りは夜の時刻を知っていなければならない。今やすべてのものが、この時のための真理を信じる者は皆が悟るべき厳粛さに包まれている。彼らは神の大いなる日を念頭に置いて行動すべきである。神のさばきがこの世に臨もうとしており、私たちはその大いなる日に備える必要がある

「私たちの時間は貴重です。将来の不死のいのちに備えるための猶予期間は、私たちにはわずか、ほんのわずかな日数しか与えられていません。行き当たりばったりの行動に費やす時間はありません。神の言葉を表面的にしか扱わないことを恐れるべきです。」『Testimonies』第6巻、407頁。